

博士学位論文（要約）

森有礼文政期の徳育構想とその射程  
—文部省編纂「倫理」科教科書をめぐる論争空間—

林子博

京都大学大学院教育学研究科

2015 年

## \*論文のキーワード

---

明治徳育史、教育勅語、森有礼文政期、徳育、「倫理」科、『倫理書』、西村茂樹、宗教、論争空間

## \*論文の章立て

---

### 序 章

第一章 『倫理書』編纂の前提—「修身」から「倫理」へ—

第二章 『倫理書』の編纂体制—編纂委員の群像と雑誌『国民之教育』—

第三章 『倫理書』編纂過程における論争関係—学校教育における「尊信」の不／可能性

第四章 『倫理書』の構成原理—「倫理」と「道德」のあいだ

終 章 教育勅語以後の『布氏道德学』—日本弘道会誌上の批判を手がかりに

## \*論文要約

---

本論文は、森有礼文政期（1885年12月～1889年2月）の徳育論の特質や歴史的意味について、文部省が編纂した中学校・師範学校用「倫理」科教科書を軸にして考察した研究である。従来の明治徳育史研究では、主に教育勅語の成立史やそれに直結するような議論を中心に研究が蓄積されてきた一方で、必ずしも教育勅語につながらない複数の選択肢の間の葛藤への着目が不十分と言わざるを得ない。教育勅語の成立以前、「道德ノ標準」の所在をめぐって様々議論が飛び交っていたのである。そうした百家争鳴の時代状況のなかで、そもそも徳育をめぐっていかなる選択肢があり、これらの選択肢が事態の推移によりいかにして限定されてきたのか。その過程では、いかなる抗争や妥協が生じたのか。そうした葛藤における力学関係とそこに孕まれた近代教育の可能性を浮かび上がらせることが本論文の目的である。

上記の目的を達成するために、本論文では、森文政における徳育構想の政策的実践といえる、中学校・師範学校の「倫理」科（最終学年）向けの教科書『倫理書』の編纂過程とこれに対する諸家の見解に着目した。『倫理書』はこれまで、実質的に文相森有礼個人の作品として、森の思想形成という視点から捉えられてきた。それに対して、本論文はその集团的著作という性格を重視する立場から、同書の中心的起草者が主筆格を務めた雑誌『国民之教育』という媒体に掲載された諸論説を通して、『倫理書』が何を指して、誰に對抗しながら、いかなる意図に基づいて作られたのかについて考察した。これにより、『倫理書』編纂の背後にあった、徳育における宗教導入の是非をめぐる、『倫理書』編纂委員と宗教利用論者との論争関係を浮き彫りにした。また、『倫理書』の成立過程と論理構成を分析することで、思想により感情（「本国ノ情」や「君臣ノ情」等）の暴走を抑制すべきという観点が意図的に強調されたことを明らかにした。また、こうした観点が、

「倫理」科（初学年）の教科書として森文相に選定された翻訳教科書『布氏道德学』にも一貫されていることを指摘した。さらに、教育勅語発布後に現れた『布氏道德学』批判を検討することで、初等教育にかかわる局面における森文政期の「倫理」科教育の行方について論じた。

以上の検証を通じて、本論文は、森文政における徳育構想の持つ独自性と歴史的意味を捉え直した。すなわち、それは、教育勅語発布前夜における「道德ノ標準」論議に呼応しながら、特定の価値や道徳的規範への「尊信」を要求するような類のものではなく、個々の行為の正邪善悪をめぐる判断の主体を求めるものであることを明らかにした。